# 本気になっていく恋

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本気になっていく恋

【Ｎコード】

Ｎ６５１１Ｏ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

匠馬は麻美とは最初遊びのつもりだった。ところがそれが次第に変わっていく。遊びからはじまる恋のお話です。

# 第一章

本気になっていく恋

最初は遊びだった。

海川匠馬は黒髪を右のところで奇麗に分けている。それも浮かした感じでだ。大きい口元は一直線で優しげなものであり奥二重の目は穏やかな光を放っている。その目は少し切れ長であり横に一直線である。太く黒い眉もこれまた一直線だ。背は一七五程で締まっている。均整が取れていると言うべきか。

その彼はだ。この時所謂合コンに参加した。これはたまたまだった。

友人の一人にだ。こう声をかけられたのだ。

「御前今フリーだよな」

「ああ、それがどうしたんだ？」

「そうか、じゃあいいよな」

彼は匠馬の言葉を聞いて確かな顔で頷いた。

「一緒に行ってもな」

「一緒？何処か行くのか？」

「ああ、これから合コンに行かないか？」

「合コンか」

「どうだよ、それ」

あらためて彼に問うのだった。

「これからな。バイトがあるんなら別だけれどな」

「幸いか？今日休みだよ」

こう返す匠馬だった。

「今日はな」

「じゃあ丁度いいな。行くか」

そこまで聞いてまた言ってきた友人だった。

「その合コンにな」

「ああ。それでな」
「何だ？何かあるか？」
「相手は誰なんだ？」
それを友人に対して問うのだった。
「相手は？俺達と同じ大学生か？」
「ああ、文学部の娘達なんだけれどな」
そこだというのだ。しかもどうやら同じ大学であるらしい。
「そこの娘達だけれどな」
「文学部か」
「ああ、ここも女の子は多いけれどな」
「まあな」
二人がいるのは芸術学部である。匠馬は美術科であり友人は音楽科だ。そこでそれぞれの教員免許を手に入れようと頑張っているのである。
「結構な」
「それでも他の学部の娘と会うのもいいだろ」
「そういうものか」
「まあ彼女が見つからなくてもいいさ」
友人は笑いながら話してきた。
「それでもな。合コンって多分に遊びだしな」
「遊びか」
「遊びだよ。女の子と話して面白いことやる遊びだよ」
その笑顔には何の屈託もない。心から言っていることがわかる顔だった。
「だからな。気軽に行こうぜ」
「ああ。じゃあ遊ぶか」
「向こうもその気だしな。気楽に、気楽にな」」
こんな話をしてだ。その合コンに行く匠馬だった。その場所はだ。
場所はカラオケボックスであった。そこの入り口に入ると小柄で顔立ちは整っているが非常に憮然とした顔の女の子がいた。カウン

ターに立って頭には横浜ベイスターズの帽子がある。後ろには野球のスコアがある。見れば横浜が広島に十点差で負けてもう八回だ。
「うわ、今日も酷いな」
「ああ。ここまで負けるか」
友人も匠馬もまずはその点差に驚いた。カウンターを飾るベイスターズグッズが悲しく見える。
「相変わらず弱いな」
「どうしようもないな」
「いらっしゃいませ」７６
その女の子が憮然とした声で言ってきた。
「何名様でしょうか」
「四人な」
「四人か」
「ああ、四人な」
店の女の子ではなく匠馬への言葉だった。
「四人なんだよ」
「俺達が二人で向こうも二人か」
「ああ、もうすぐ来るからな」
「そうだな、待つか」
「四名様ですね」
ここでまたベイスターズの帽子を被った女の子が尋ねてきた。

## 第二章

「わかりました」
「ああ、それで頼むな」
「お部屋はここでいいでしょうか」
女の子は憮然とした顔で部屋も決めていく。そうしてだった。
暫くして店に二人の女の子が来た。一人はだ。
明るい顔をした小柄な女の子だ。胸の小ささが目立つが顔立ちは可愛い。眉は小さく大きな目をしていて長い髪を左でくくっている。そして左右に垂らしている髪をカールにしている。
その娘は青いジーンズに黒いタンクトップというラフな格好だ。その格好の娘がまず挨拶をしてきた。
「やっほーーー、来たよ」
「ああ、来たか」
「うん。あんたも一人連れて来たのね」
「ああ、こいつな」
友人は笑顔で右手の親指で隣にいる匠馬を指差した。カウンターの前で明るく話す。ＢＧＭは野球中継の解説である。そこでまた一点入った。
するとだ。女の子の顔がさらに不機嫌になった。目が怒っている。
その女の子はそれを見てだ。困った顔で言った。
「あちゃーーーー、横浜今日もまずいわね」
「あのさ、気持ちはわかるけれどさ」
「はい、わかってます」
カウンターの女の子は友人とその小柄な女の子の言葉に応える。憮然なままでだ。
「勝つこともありますから」
「ええ、だからね」
「部屋案内してくれよ」

「わかりました」
その憮然とした女の子に案内されて明るい白いカウンターからあえて暗くさせたカラオケボックスに入った。テレビもあればマイクもある。テーブルの上には曲のリストもある。
そこに四人で座る。それからだった。
「とりあえずな」
「ああ」
「お楽しみメニューは頼まないようにしような」
友人はこう自分の隣に座っている匠馬に言った。向かい側には女の子達がいる。
「今日はな」
「そうだな。ベイスターズが負けてるからな」
「絶対に酒に合わないものが出て来るからな」
だからだというのである。
「それはいいな」
「ああ、わかってるさ」
匠馬も頷いてだ。それで決まったこうしてその合コンとなった。
彼の前にいるのはだ。背はあまり高くなく黒い髪を伸ばした女の子だ。すらりとした身体で顔ははっきりとした少しアーモンド型の目にはっきりとした顔をしている。額は切り揃えた前髪で覆っている。
彼女は白いブラウスと青いズボンだ。その彼女が彼の前にいた。
その彼女がだ。こう名乗ってきた。
「朝倉麻美っていうの」
「朝倉さんっていうんだ」
「麻美でいいわよ」
笑ってこう言うのだった。
「麻美でね」
「私は麻美ぽんって呼んでるけれどね」
彼女の友人のあの派手な娘が笑って言ってきた。

「ああ、私は如月地和っていうの」
「へえ、地和っていうのか」
「そうよ、あんたの名前は？」
「俺は見剣仁ってんだ」
友人は笑ってこう名乗った。紛れもなくその本名である。
「どうだよ、いい名前だよ」
「見剣っていうのね」
「ああ、どうだよこの名前」
「何か物騒にも聞こえるけれどね」
こう返す地和だった。
「あんたの名前は下の名前しか知らなかったけれどね」
「だよな。俺もちいのこと仇名でしか知らなかったしな」
「わたしも。仁ちゃんだしね」
明るく返す地和だった。どうやら二人はそうした仲のいい友人同士らしい。それは横で話を聞いていた匠馬にもよくわかることだった。
そしてだ。話しているうちに色々とメニューが来た。点心にラーメンである。それと酒だ。
「はい、どうぞ」
「ああ、どうも」
あのベイスターズの帽子の女の子だ。相変わらず憮然とした顔でだ。そのうえで台車に乗せたメニューを持って来た。そうして次々とそのメニューをテーブルの上に運んできたのである。

# 第三章

それを前にして飲み食いとカラオケもしながらだ。仁は今度は匠馬に対して言うのだった。
「おい」
「何だよ」
「話してるか？」
こう彼に言うのである。
「相手の女の子とよ」
「この娘とかよ」
「そうだよ。折角舞台設定してやったんだからな」
笑いながらの言葉だ。そのうえで今は小龍包を食べている。中にはしっかりとスープもある。その熱さにはふはふとしながらの言葉であった。
「ちゃんとやれよ」
「ああ、わかってるよ」
「麻美ぽんもよ」
地和の方も麻美に声をかける。
「わかってるわよね、それはね」
「ええ、それは」
「あとどんどん食べてよ」
このことも言うのだった。
「さもないと大きくなれないわよ」
「大きくって。私もう大学生だけれど」
「胸はずっと成長するものなのよ」
その小さな胸を麻美の右腕に付けての言葉である。
「だからね。どんどん食べないと」
「胸は何時までも成長するって」
それを言われてもだった。目をしばたかせて戸惑った顔になる麻

美だった。それを聞いてもである。信じていないことは明らかであった。
「そんなの初耳よ。大体それだったら」
「それだったら？」
「ちいだって。胸は」
「大丈夫よ」
しかし彼女は胸を張って言い切るのだった。
「私は絶対に大きくなるから。絶対にね」
「どうしてそう言えるの？」
「お姉ちゃんも妹も胸大きいし」
まずは自分の姉妹を話に出すのだった。
「それにお母さんだって大きいのよ。それだったらね」
「そうなの」
「そうよ。絶対に大きくなるわよ」
こう言うのである。
「絶対にね」
「そうか？」
力説する彼女に言ってきたのはだ。仁だった。彼は真顔で今は海老焼売を食べている。そのうえで醤油ラーメンを見据えながらその地和に話すのだった。
「御前幾ら何でもそれは」
「それはって何よ」
「大きくならないだろ」
その地和への言葉だ。
「もう絶対にな」
「大きくならないっていうの」
「御前Ａカップじゃねえかよ」
何故かこのことも知っているのだった。
「それがどうしてＧカップになれるんだよ」
「絶対なれるわよ」

だがまだ力説する地和だった。
「そうよ、絶対にね」
「絶対にかよ」
「何があってもね。その時にびっくりしなさいよ」
「女の胸は大きいだけじゃねえんだよ」
その醤油ラーメンを食べながらの言葉だった。
「そんなのにこだわらなくていいだろ」
「そうなの？」
「そうだよ。俺は小さい方がいいしな」
何気に爆弾発言である。しかし誰もそのことには酒のせいで気付いていなかった。
そしてだ。匠馬はその中で飲みながらだ。麻美と話すのだった。飲んでいるのはレモンハイであった。
「あのさ」
「ええ」
「文学部だったよね」
「ええ、国文学ね」
そこだと答える麻美だった。

# 第四章

「そこにいるの」
「そうか、じゃあ純文学とか？」
「古典研究してるの。紫式部日記とか」
それだというのである。
「それ研究してるの」
「そうか、そっちなんだ」
「そうなの、文章難しいけれど中々勉強になるわよ」
こうその匠馬に話す麻美だった。
「紫式部はな」
「俺そっちは知らないんだけれどさ」
「ええ」
「美術なら知ってるよ」
彼の専門のそれである。
「マグリットとかね」
「ああ、シュールリアリズムね」
「ああいう絵が好きでさ。将来は学校の先生になるつもりだけれど。
それか学芸員かね」
「いいんじゃない？それで」
「いいんだ」
「何か身に着けるのはいいことじゃない」
だからだと言う麻美だった。
「それでね。そうなんだ、シュールリアリズムなんだ」
「うん」
あらためて絵の話になった。
「それなんだけれどね」
「マグリットとかダリとかよね」
「マグリットが好きだよ」

ベルギーの画家のルネ＝マグリットだ。下半身が裸女の魚や空に浮かぶ巨大な岩の上にある城等。そうした現実にはない絵で有名である。
「あの感じがね。あとシュールリアリズムじゃないけれど」
「他には？」
「ヒロ＝ヤマガタも好きだね」
「あっ、それ私も」
「ああ、ヒロ＝ヤマガタ好きなんだ」
「ええ、大好きなの」
そんな話をするのだった。二人も二人で楽しい話になった。
それが終わってからだ。地和が仁に対して言う。今は店のビルの前である。
「これからだけれど」
「もう酒と食い物はいいだろ」
「ええ、それはね」
「じゃあ終わりだよな」
「何言ってるのよ、まだよ」
しかしだった。地和はここでこう言ってきたのだった。
「まだやることがあるじゃない」
「あるのかよ」
「あるわよ。まず私達だけれど」
笑って仁に言うのである。
「これからはね。二人でね」
「夜のデートかよ」
「久し振りにどう？」
また話すのだった。
「それでね」
「ああ、いいなそれ」
「いいでしょ。あと麻美」
自分達の話をしてからだ。そのうえで麻美に顔を向けて言ってみ

せた。
「あんたはね」
「私は？」
「あんたはあんたで楽しくやって。ああ、違ったわね」
言った側からだ。自分の言葉を訂正させたのだった。
「あんた達ね」
「あんた達って」
「二人で楽しくやりなさい。いいわね」
「はい、それじゃあ」
こう話してだった。強引に二人にさせたのだった。仁と地和はそのまま二人で夜の街に消えた。その時に手と手を絡めさせている。
そしてだ。匠馬と麻美は二人になった。店のその前でだ。二人は顔を見合わせて話をするのだった。
「これからだけれど」
「どうしようかしら」
麻美は少し困った顔になっていた。

# 第五章

「これから」
「ええと、カラオケは行ったし」
「ええ」
とりあえず匠馬の言葉に頷いてだった。それからだった。
「今度は何処に行く？」
「何処にね」
「そう、何処に行く？」
また麻美に問うた。
「居酒屋ならこのビルに一緒にあるけれど」
「白鯨よね」
「うん、そこに行く？」
こう麻美に提案した。二人共カラオケボックスで結構食べた。だがそれでもまだ食べられたのだ。そしてそれと共に飲めもしたのだった。
「それであらためてね」
「飲んで食べてよね」
「それでどうかな」
「そうね」
そこまで聞いてだった。麻美は少しの間考える顔になってだ。そうして言うのだった。
「それじゃあ今から」
「行こうか。一緒に楽しくやろう」
また麻美に言ってみせた。
「あらためてね」
「ええ。あと」
「あと？」
「よかったらだけれど」

今度は麻美の方からだった。彼女の方から言ってきたのである。
「また一緒に楽しくやりたいけれど」
「飲んで食べてなんだね」
「カラオケも好きだし」
そちらもだというのだ。麻美はその顔をにこりとさせていた。
「遊びましょう。二人でね」
「うん、そうしよう」
二人で話してだ。そのうえで今は白鯨で楽しくやった。それが二人のはじまりだった。
それから時々一緒に飲んで食べた。完全に遊び友達になった。そしてそのことを仁にも言われるのだった。
「御前等最近いい感じか？」
「いい感じって？」
「だからだよ。結構一緒にいるらしいじゃないか」
同じ講義を受ける前にだ。教室の中で話をするのだった。教室は今は高校にあるような比較的小さく纏まった教室である。机や椅子も高校にあるような一つ一つになっている木とパイプのものである。そこに座って話をしているのだ。
「付き合ってるのか？」
「付き合ってはないな」
それはないというのである。
「遊び友達だよな」
「何だよ、そんなのかよ」
「御前等と同じか？」
そして彼と地和のことも言うのだった。
「それは」
「俺達一応付き合ってるんだけれどな」
だが仁はこう返すのだった。
「それはな」
「そうだったのか」

「そうだよ。しかしお互いに相手を探す為の合コンだったんだがな」
「遊び友達はできたけれどな」
「それもいいか？」
腕を組んでの今の仁の言葉だった。
「彼氏彼女になってもらいたかったんだけれどな」
「まあ俺は楽しんでるけれどさ」
匠馬は笑顔で仁に返した。
「結構な」
「それでもいいか。御前とあの娘がいいんならな」
仁は少し残念そうだったがそれでも頷きはした。そうしてそのうえで二人を見守ることにしたのだった。そしてその匠馬と麻美はだ。この日も一緒に遊んでいた。
今日は酒ではなくケーキだった。洒落たケーキ屋に入ってそこでケーキにお茶を楽しんでいる。尚ここは麻美の紹介である。
ケーキはバイキング形式でどれを食べてもよかった。麻美は大きな白い皿の上にチョコレートやモンブランやチーズのそれぞれのケーキをこれでもかと乗せてやって来た。そしてそのうえで匠馬に対して問うのだった。
「どう？このお店」
「いいね」
彼もまたケーキを食べている。見れば今食べているのはチョコレートケーキだ。それを食べながら笑顔で麻美に応えているのだ。

# 第六章

「安いし美味しいしね」
「ケーキっていいわよね」
「そうそう、子供の頃一度でいいからお腹一杯食べたくてね」
「今それが叶ったってことね」
「そうなるね。それじゃあ」
「はい、これ」
言ってその皿の上のケーキ達を見せるのだった。見せながらそのうえで自分の席に座る。そこは匠馬の向かい側の席である。
「これもどうぞ」
「悪いね、持って来てくれたんだ」
「私の好きなのばかりだけれどね」
笑顔で自分の前にある小さな皿の上にモンブランを置く。そうして食べはじめる。
その食べる笑顔を見てだ。匠馬は。
思わずその手を止めてしまった。その時の麻美の顔は彼がこれまで見たことのないような愛くるしいものだったからだ。はじめて見る顔だった。
麻美もそれに気付いてだ。ふと彼に問い返したのだ。
「どうしたの？」
「いや、別に」
「まさか顔にケーキのクリームついてるとか？」
「いや、それはないから」
その顔の麻美に対しての言葉だ。
「別にね」
「そう。だったらいいけれど」
「うん、それでさ」
「それで？」

「今度は何処に行こうか」
こう彼女に問うたのである。
「今度はさ。何処に行く？」
「そうね。そういえば今女子プロ野球はじまったじゃない」
「うん」
「それ、どうかしら」
今度はそこでどうかというのだ。
「それでね」
「いいね」
それに賛成する匠馬だった。
「それじゃあ今度はね」6
「そこに行きましょう」
こうしてだった。二人でその女子プロ野球を観に行く。球場はプロ野球の球場と比べると小さい。だがそれでも満員御礼という状況だった。
そしてだ。二人は何とか席に座って試合を観る。周りは本当に満室だった。
それを見てだ。麻美は少し苦笑いをして彼に言ってきた。
「凄いわよね」
「そうだね。こんなに人気があるなんてね」
「阪神の試合より入ってるかもね」
彼は楽しげに笑ってジョークを出した。
「ひょっとしたらね」
「そうかも知れないわね。広島市民球場よりもね」
何気に二人共それぞれ別のチームのことを話に出している。
「お客さん多いかもね」
「甲子園もいいけれどね」
「そうよね。けれど東京ドームはね」
「ああ、あんなところ行っても何にもならないからね」
「そうそう」

そして二人で東京ドームはいいというのである。
「あんな場所ね。どうでもいいわ」
「全くだよ」
「それにしても」
東京ドームをけなしたうえで話を戻してきた麻美だった。
「何か試合面白くない？」
「そうだね、確かにね」
実際にその試合を観てだ。匠馬も言うのだった。
「テクニカルな試合になってるわよね」
「あっ、ダブルスチールね」
言っているそのそばからだった。一方のチームがダブルスチールを仕掛けてきた。
それは成功だった。忽ちのうちにランナーが二人得点圏に来た。
それを観てだ。麻美はまた言った。
「あそこでするなんてね。そうはしないわよね」
「そうだね。それに」
「それに？」
「ほら、相手だって」
そのダブルスチールを仕掛けられた側だ。確かにピンチである。
しかしそれでもだ。

# 第七章

彼等はここでだ。何か動きを変えてきた。ファーストとサードが不意に身構えたのだ。外野陣も前に出てバックホーム態勢に入っていた。

それを観てだ。そのうえで麻美に話すのだった。

「動こうとしてるよ」

「そうね、本当にね」

「何時何があってもいいようにしてるね」

「ええ。そうね、相手が何をしてもいいようにね」

「ええと、今は」

匠馬はここでスコアボードを見た。七回裏で攻撃側が一点負けている。一死二、三塁だ。そしてバッターボックスにいるのは八番だ。

それを観てだ。匠馬は言った。

「スクイズかな」

「そうみたいね。長距離バッターじゃないみたいだし」

「それか犠牲フライを狙うか」

「どっちかよね」

「どっちかな」

匠馬は真剣な顔で言う。

「一体」

「ええ、何が来るかしら」

麻美も固唾を飲んで見守る。その中でだ。

ピッチャーが投げた。するとだ。

そのバッターがバットを寝かせた。それは。

「やっぱりか！」

「スクイズね！」

二人は同時に叫んだ。それだったのだ。

「スクイズか」

「観て！」
麻美がここで匠馬に対して言った。
「ほら、ファーストとサードが」
「突っ込んだ！」
三塁ランナーも走っている。誰がどう観てもスクイズだ。そしてだ。
投げられたボールはウエストだった。しかし何とかバットには当たった。
だがそれはさっとその前に出ていたファーストに処理されだ。彼によって三塁ランナーがタッチアウトされ終わった。双方共見事な頭脳戦だった。
その後結局一点が九番バッターのタイムリーで入った。それで同点となり後は引き分けになった。双方共見事な頭脳戦を繰り広げた。
それを帰りに話す。麻美は明るい顔で匠馬に話す。
「凄かったわよね」
「うん、とてもね」
「やっぱり野球はああでないと」
麻美はにこにことしていた。
「やっぱりね。そうじゃないとね」
その顔を見てだ。匠馬は気付いたのだった。
その笑顔がこれまで見たことがないまでに魅力的なことにだ。そのことにだ。
暫く見惚れていた。しかしそれは突然強制的に終了させられた。
麻美がだ。こう言ってきたのだ。
「どうしたの？」
「えっ！？」
「何かあったの？」
こう言ってきたのだ。
「何かおかしいけれど」
「おかしいって」

「急に話すの止めてぼーーーってして」
それでどうかしたのかというのだ。
「どうしたの、本当に」
「あっ、何でもないよ」
ここは誤魔化した彼だった。
「別にね。何もね」
「そう、何もないの」
「うん、それよりもさ」
「それよりも？」
「これから何処に行く？」
こう尋ねたのである。

# 第八章

「これから。何処に行く？何か食べに行く？」
「じゃあスパゲティはどうかしら」
「スパゲティだね」
「ええ、それね」
そのスパゲティだというのである。
「それだけれどね」
「スパゲティか。いいね」
彼もそれでよかった。彼の好物でもあるからだ。
「だからね。それでね」
「ええ、じゃあね」
「それを食べに行こうか」
「そうしましょう」
こうしたことが続いてであった。匠馬は何時しか二人きりの時間を楽しむようになっていた。そうしてそうしたことが続いてである。

ある日だ。学校の喫茶店でコーヒーを飲みながらだ。こう仁に言ったのである。
「参ったな」
「参ったって？何にだ？」
「好きになったんだ」
こう言うのだった。
「どうもな。本当にな」
「好きになったって彼女がかよ」
「ああ、麻美ちゃんがな」
まさに彼女がだというのだ。
「本当に好きになったんだよ」
「おいおい、マジかよ」

仁は今の匠馬の言葉を聞いてだ。少し驚いて言う。少しである。
「それはまた」
「大して驚いていないんだな」
「その為の合コンだったからな」
笑いながらの明るい言葉だった。
「だからな」
「それでか」
「ああ、全然オッケーだよ」
こう匠馬に返すのだった。
「本当にな」
「それじゃあ告白とかしていいのか」
「ああ、ただしな」
「ただし？」
「待ってな。今あいつにも声をかけるからな」
言いながら携帯を出してみせた。そのうえでまた言うのだった。
「待ってろよ。向こうにも言うからな」
「麻美ちゃん本人じゃないよな」
「こういう時は直接本人に言わないのが鉄則なんてよ」
また笑って言う仁だった。
「あいつって言ったらこの場合はな」
「御前の彼女か」
「ああ、ちいに言うからな」
地和のその仇名を呼んでの言葉だった。
「あいつを呼んで三人で相談するからな」
「それでか」
「そのうえでか」
「ああ、話すからな」
こう言ってであった。三人で話すことになった。すぐにその地和が店に来た。そうしてそのうえで彼女の言葉を聞くとだった。
「ああ、全然オッケーよ」

「オッケーって！？」
「それって」
「だから。麻美よね」
天真爛漫とも言うべき顔で匠馬にも仁にも言うのである。
「実は昨日あの娘から同じこと相談されたのよ」
「同じってことは」
「つまりか」
「そうよ、そのつまりよ」
また笑顔で返すのだった。
「わかったわね、それじゃあ」
「俺が告白したらそれで」
「恋愛成就よ」
まさにそうなるというのである。
「見事ね」
「そうだったんだ」
「どう？告白する？」
その彼に直接問うてもみせた。

# 第九章

「それでだけれど」
「だから相談してもらってるんだけれど」
「答えは決まりね。だったら」
「だったら？」
「今本人呼ぶから」
こう言うのだった。実に素っ気無くだ。
「いいわね」
「えっ、今って」
「思い立ったが吉日よ」
だからだというのである。
「いいわね、だから今よ」
「まだ心の準備が」
「コーヒー飲んでそれで落ち着けばいいさ」
仁は実に軽く述べたのだった。
「どうせあの娘来るまで時間あるんだからな」
「そうか」
「そうだよ。じゃあいいな」
「うん、わかったよ」
仁の言葉にも頷く。見れば地和はもう自分の携帯でメールを入れていた。その動きが実に速い。
そうしてだ。メールを入れ終わるとだ。二人はすぐに席を立つのだった。
「よし、じゃあな」
「お邪魔虫はこれでね」
「えっ、帰るの」
その立ち上がった二人に驚いて問う匠馬だった。
「ここで」

「だからよ。告白は一対一でするものだろ？」
「私達は邪魔にしかならないわよ」
笑顔で返す二人だった。
「だからな」
「それでなのよ」
「それでなんて」
「だからな。吉報しかないからな」
「向こうもそうなんだし」
不安な顔を見せる彼への言葉だった。
「俺達はこれでな」
「後で話を聞くからね」
こう言って姿を消す二人だった。そして言われるままコーヒーを飲んでとりあえず落ち着いた彼のところにだ。彼女が来てだ。そして次の日だった。
あのカラオケボックスに四人いた。まずはカウンターはだ。
「今日は試合なしか」
「よかったね」
仁と地和がだ。スコアボードが極めて静かなのを見て落ち着くのだった。
「あのびっくりメニューは変化なしか」
「よかったよかった」
「いらっしゃいませ」
そして店の女の子も平和な笑顔であった。ベイスターズの帽子を被ってはいるがだ。
「どのお部屋ですか？」
「態度が全然違うね」
匠馬もその彼女を見ながら仁に囁く。
「本当に」
「こういう娘だからな」
仁もそれに応えて彼に囁き返す。相手に聞こえないようにしてだ。

「それはな」
「割り切ってってことだね」
「ああ、そうだ」
これでいいというのだった。
とりあえず彼女の話は終わってだ。仁はあらためて彼に言ってきた。
「彼女も来るんだよな」
「ああ、すぐにな」
笑顔で返す匠馬だった。
「来るってさ」
「そうか。じゃあ四人で楽しくやるか」
「そうだね、四人でね」
「飲むか」
仁は明るい顔で述べた。
「それじゃあな」
「ああ、今日はそうしよう」
こう二人で言ってそのうえでエレベーターの方を見る。カウンターの右手にあるそれのランプが徐々に上にあがってきてきてだ。
その扉が開いてそこから出て来たのは地和と彼女だった。彼女は笑顔で匠馬に対して言ってきた。
「じゃあ匠馬君、今からね」
「うん、楽しくやろう」
笑顔で言い合うのだった。今匠馬は心から喜んでいた。彼女とまた遊べることにだ。そのことが今の彼にとって最高の幸せだった。
それは彼女、麻美にとってもだ。

本気になっていく恋　　完

2010・5・10

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6511o/

---

本気になっていく恋

2010年11月1日21時55分発行